

---

# 第1回 新選組かるた大会

恋桜鬼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

第1回 新選組かるた大会

### 【Nコード】

N0465I

### 【作者名】

恋桜鬼

### 【あらすじ】

新選組の幹部でかるた大会しちやいます。千鶴目線ですが、平助中心です・・・。

**（前書き）**

- 斉藤さんのキャラが少し崩れます。
- 最後無理やり終わらせてます。
- 近藤、山南、山崎、井上などは出ません。

お正月が少し過ぎた頃、部屋から庭に積もった雪を眺めていると――

「千鶴――！！！」

「！！！」

私の名前を呼びながら、聞きなれた声がだんだん近づいて来る・・・

この声は・・・・・・・・

「千鶴――！ 遊ぼう」

「へ、平助君！？ どうしたの！！ 巡察は??」

声の正体は平助君だった

走ってきたみたいで、息があがってる・・・

「もう終わったよ！！ ねえ、なんかして遊ばね？」

「あ、遊ぶの？ いいけど・・・ 何するの？」

二人でできる遊びっていうと・・・

雪が降ってるから外は無理だね・・・

「うーん… あやとりとか折り紙とか？」

「それ女の子の遊びじゃーん!! 俺できねーよ(汗)」

「じゃー平助君は何したいの？」

平助君は少し考えてから

「そうだなー… 正月だし“かるた”やろっぜー!!」

「か、かるた!?!」

二人でかるたはできないんじゃないや…

私が平助君の提案に戸惑っていると

「かるたかあゝ 俺たちも雑ぜてくれよ」

また誰が入ってきた

「あゝ!! 新ぱつつあんに左之さん!!… なんでここにいるんだよ!!」

永倉さんと原田さんだった

「そりゃゝ 平助が巡察から帰るなりすっげー速さで走って行ったから心配して

ついて来たに決まってるだろ!!」

永倉さんが腰に手を当てて笑いながら話し始めた。

「まあ俺たちも暇だし、正月っぽくていいじゃねーか やろうぜ、かるた♪」

原田さんはやる気満々みたい・・・

「ちえつ、せつかく千鶴と二人で遊ぼうと思ったのに・・・」

「ん？なんか言ったか？平助」

「い、いや、何でもねーよっつ!!」

平助君はちよつと残念そう・・・

「おい、平助。肝心のかるたはあるのかよ」

そうか・・・ 絵札とかがなくちゃかるたはできないよね・・・

「うーん・・・。一君なら持つてるんじゃない??」

「いや、斉藤は持ってねーろ（笑）」

するとそこへ

「持っているぞ。」

「「「「!!!!!!!!」」」」

斉藤さんがかかるたを持って入ってきた

「さすが一君！！！」

平助君は親指を立てて喜んでる

「斉藤がかかるた持つてるとは以外だな……」

永倉さんは不思議がつてるみたい

「以前副長に石田散薬を大量に頂いた際、一緒にもらった物だ。」

「それ、いらない物押し付けられただけじゃん」

とりあいず、かるたがあつて良かった♪

「なあ、斉藤も一緒にかかるたやらねーか？」

原田さんが誘ってみる

「いや、一君はやらないんじゃない……」

「やらせてもらう。」

『『えー……っ！！！！』』

「そのかるたは俺の所有物だ。したがって俺にも参加する権利がある。」

まあいつか、大勢でやったほうが楽しいし♪

「なんだか賑やかだね。僕もかるたやりたいな」

ニコニコしながら入ってきたのは

「お、沖田さん!!」

体調があまり良くなさそうだったから寝ているのかと・・・

「総司、体調はいいのか？」

斉藤さんが聞いてみた

「うん、全然平気だよ」土方さんが過保護なだけだし、たまには体動かさないとね」

沖田さん、元気そう・・・よかった。

「しかし、こんだけ人数が集まるとはなあ・・・  
なあ土方さんも呼んでかるた大会にしねえか？」

原田さんの提案に意を唱える人はいなかった

「第一回 新選組 かるた大会――（棒読み）」

司会は土方さんになったみたい

「土方さん、もっとテンション上げていきましょうよ」

「うるせーな、俺は暇じゃねーんだよ。さっさと始めるぞ。」

きつと永倉さんたちに無理やり連れて来られたんだろうな・・・  
機嫌悪そう・・・

「いぬも歩けば棒にあたる」

「はい!」

平助君が“ゐ”の札をとったその瞬間――

<シュパーン>

「シュパーン??」

かるたには不似合いな音がした後、“ゐ”の札は上下2つに切られていた。

そして、“ゐ”と書いてある方の札を斉藤さんが持っていた。

さっきの「シュパーン」っていう音は斉藤さんの居合いの音だった

札を横取りされた平助君は当然

「あーーーーー!!!!!! 一君! それ、俺がとつたのに」

怒っていた

「証拠はあるのか？ お前が今持っている札には“ゐ”と書いていないだろう。」

“ゐ”と書いていなければ、それは“ゐ”の札ではない。」

さすが斉藤さんだ……筋が通ってる……

「でもさあ……」

「斉藤 一枚。」

「！！！！」

平助君を無視して土方さんが斉藤さんの札としてカウントした

「ちよつと、ちよつと土方さん！！！」

「るせえぞ、平助。男が細かいこと気にしてんじゃねえよ」

永倉さんの一喝で平助君はしぶしぶ席に戻った

「次」。聞くは一時の恥聞かぬは一生の恥」

「はい！！」

また平助君が札をとろうとした瞬間――

「よつ、と」

原田さんがどこから出したのか、槍で器用に札を弾いて手元に持つ

て行ってしまった

今回も横取りされた平助君は・

「ちょっと——！！！！左之さんまで！反則じゃないの!？」

平助君の言いたいこともわかるけど・・・

「武器使っちゃダメとかなかっただろ！反則じゃねーよ」

「くうゝ…みんなしてゝゝいいよ！俺だって刀使っちゃうもんね!！」

何する気なんだろう・・・平助君・・・

「次行くぞー猿も木から落ちる」

「お！あつた、あつた!！」

永倉さんが札をとろうとした時――

「たりやー!！」

平助君が投げた刀の鞘は永倉さんの手に当たって、

永倉さんは、“さ”の札じゃなくて隣の“な”をとってしまった・。

「へっへえーん!!新ばっつあんお手つきゝゝ一回休みだぜ!

「！」

「この野郎……後で覚えときやがれ!!」

やっと札がとれた平助君は上機嫌みたい……

「焼け石に水」

「はい!!」

平助君が札をとろうとしたら――

<グサツ>

……またかるたに不似合いな音がしたような……

「僕にもとらせてよ」

沖田さんが微笑んでいた

見ると、平助君がとうとうとした“や”の札には抜き身の刀が深々と刺さっていた

「鞘じゃなくて抜き身の刀を投げるとはな……容赦ねえな……  
総司……」

「……………」

さすがに平助君も何も言わなかった……

その後も、かるたらしくないかるたが続き……

結果は

沖田 15枚

斉藤 12枚

原田 10枚

永倉 9枚

平助 4枚

千鶴 0枚

その日の夜、部屋で星を見ながら――

「はあ……一枚もとれなかった……」

しょうがないよね…… あんなとりかた、私にはできないもの……

すると、部屋の外から

「千鶴。入ってもいい??」

あ、平助君の声だ！

「うん。いいよ」

平助君が入ってくる

「あのさ、千鶴。」

「ん？」

なんだろう・・・

「今度は二人で遊ぼうな！！ あやとりでも何でもいいから！！」

平助君がじっと私の眼を見て言うてくる

「うん！そうだね」

「あと、またみんなでかるたやろうな！！ 今度は全部とってやるから！！」

「それじゃー私もとれるように練習しとこつと」

また、みんなで遊びたいな・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0465i/>

---

第1回 新選組かるた大会

2010年10月14日20時28分発行